

調査報告

## 土浦市武具八幡古墳の発掘調査

滝沢 誠・大村冬樹・加藤千里  
久永雅宏・齊木 誠

### I. 調査の経緯と目的

茨城県南部に位置する武具八幡古墳は、江戸時代末期に古墳時代中期の鉄製甲冑がまとまって出土したことで知られる直径約15mの円墳である。土浦市北部(旧新治村)の新治台地上に立地し、現在は「坂田塙台古墳群第2号墳」として土浦市の遺跡台帳に登録されている。

本古墳の存在は、1983年(昭和58)に実施された土浦市武者塚古墳の発掘調査を契機として広く知られるようになった。新治村史編さん事業の一環として筑波大学の調査団(代表:増田精一教授)が実施した武者塚古墳の調査では、装飾付大刀や銀製带状金具などの副葬品とともに、石室内に安置された遺骸から毛髪が良好な状態で発見された(増田編1986)。とくに「みづら」の発見は、全国的な報道によって世間の注目を浴び、それを契機として周辺遺跡に関する様々な情報が地元住民から寄せられることとなった。それらの中に、武者塚古墳近くの古墳から出土した甲冑が地主宅に丁重に保管されているとの有力な情報があり、所蔵者の許可を得て確認したところ、古墳時代中期の鉄製甲冑2組分(眉庇付冑、衝角付冑、横矧板鋌留短甲、小札甲、各種付属具)を含むきわめて重要な資料の存在が明らかとなったのである。その後、それらの資料については筑波大学で整理を進め、武者塚古墳の発掘調査報告書にその成果を収録することとなった(滝沢1986)。

本古墳から出土した鉄製甲冑は、その豊富さに加えて発見の経緯を記した古文書(「具足御届書之写し」)が残されているという点でも特筆される(増田編1986)。その内容は、およそ以下のとおりである。

下坂田村・塙三四郎の屋敷につづく台地は塙台と呼ばれ、そこには名も無い古墳の存在が知られていた。安政元年(1854)12月13日、三四郎の息子・喜市が古墳の下草刈りに訪れたところ、墳頂に山芋のつるがあった。そこで、鍬を持ってきてつるの根元を一、二尺掘ると、鍬先に何か当たった。取り出してみると見慣れない金物だったので、三四郎を呼んできて掘り出したところ、「武具之類」と考えられた。これは大変珍しいことと思い村役人に知らせたものの、彼らが揃って現地を訪れた際には、掘った穴はすでに埋め戻されていた。ただし、当事者たちの説明に矛盾する点はなかったため、安政元年12月15日、発見品を持参の上、村役人5名の連署により土浦藩の代官に文書による届け出を行った。

上記のように、本古墳出土の甲冑については、江戸時代における発見の経緯をある程度詳し

く知ることができる。しかしながら、これまでに学術的な発掘調査が行われたことはなく、全国的にも数少ない小規模古墳における複数セットの甲冑出土事例として、その実態が十分に把握されていないのも事実である。したがって、本古墳の埋葬施設や他の副葬品についてさらなる情報が得られるならば、茨城県南部地域の古墳時代研究はもとより、広く甲冑出土古墳の研究に資する点が少なくないと思われるのである。

こうした問題意識のもと、2013年9月、筑波大学考古学研究室では武具八幡古墳の再測量調査を行うとともに、墳頂部の地中レーダー探査を実施した。この調査は、その後の発掘調査を念頭に置いた予備調査であり、墳頂部の地中レーダー探査では、埋葬施設の可能性を含むいくつかの反射を確認することができた(辰巳2015)。

以上の予備調査を受けて、今回の調査では、武具八幡古墳の埋葬施設と墳丘構造・規模の把握を目的とし、墳頂部及び墳裾部の計5ヶ所で発掘調査を実施した。とくに墳頂部については、埋葬施設の範囲及び上部構造を確認するとともに、甲冑発見時の掘削坑を明らかにすることを主な目的とした。また、墳丘上では以前に須恵器片が採集されていたため、良好な発掘調査資料の獲得を目指した。本報告は、こうした目的に沿って実施した発掘調査の概要を記したものである。

発掘調査は、滝沢 誠(筑波大学人文社会系・准教授)を調査担当者とし、2014年9月8日～9月27日に実施した。また、現地での調査には、以下に記す筑波大学の大学院生と学類生が参加した。

大村冬樹、加藤千里、久永雅宏、ブライ・フリバル・ペトラ(以上、人文社会科学研究所歴史・人類学専攻)、齊木 誠、平間堯明、福田 誠、上ノ山拓己、池田 駿、河嶋優輝、森戸日咲子、荒井啓汰、新井 遙、岩澤あゆみ、田辺えり(以上、人文・文化学群人文学類)、島田智加(芸術専門学群)

なお、本調査は、平成26年度筑波大学人文社会系プロジェクト「筑波古代地域社会の形成過程に関する考古学的研究」(代表者：滝沢 誠)の一環として実施したものである。

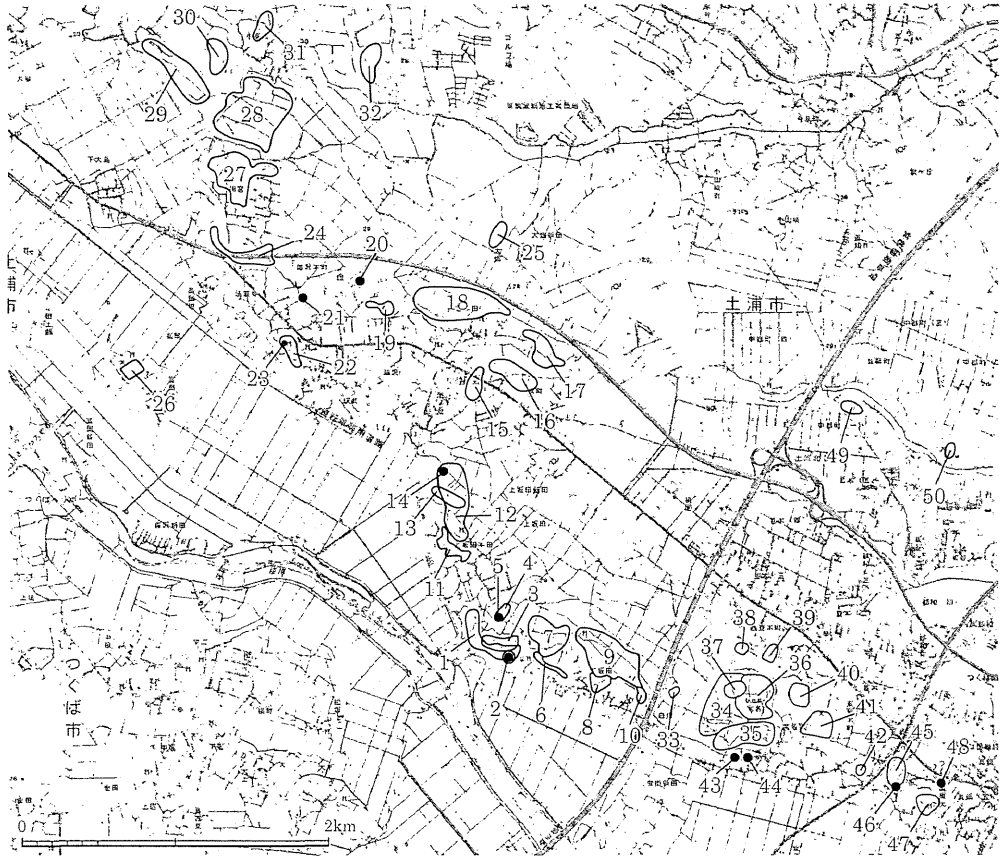
(滝沢 誠)

## II. 位置と環境

武具八幡古墳(第1図2:以下遺跡名に続けて同図中の番号を記す)は、茨城県土浦市下坂田1044番地に所在する。土浦市は茨城県の南部に位置し、北に筑波山を望み、西側は霞ヶ浦に面している。市の中央部には桜川が南東に向かって流れており、本古墳は桜川左岸の標高約30mの新治台地縁辺部に立地する。この新治台地上には古墳時代の遺跡が集中しており、その分布状況は、坂田地区、田宮地区、常名地区の3地区に大別することができる。

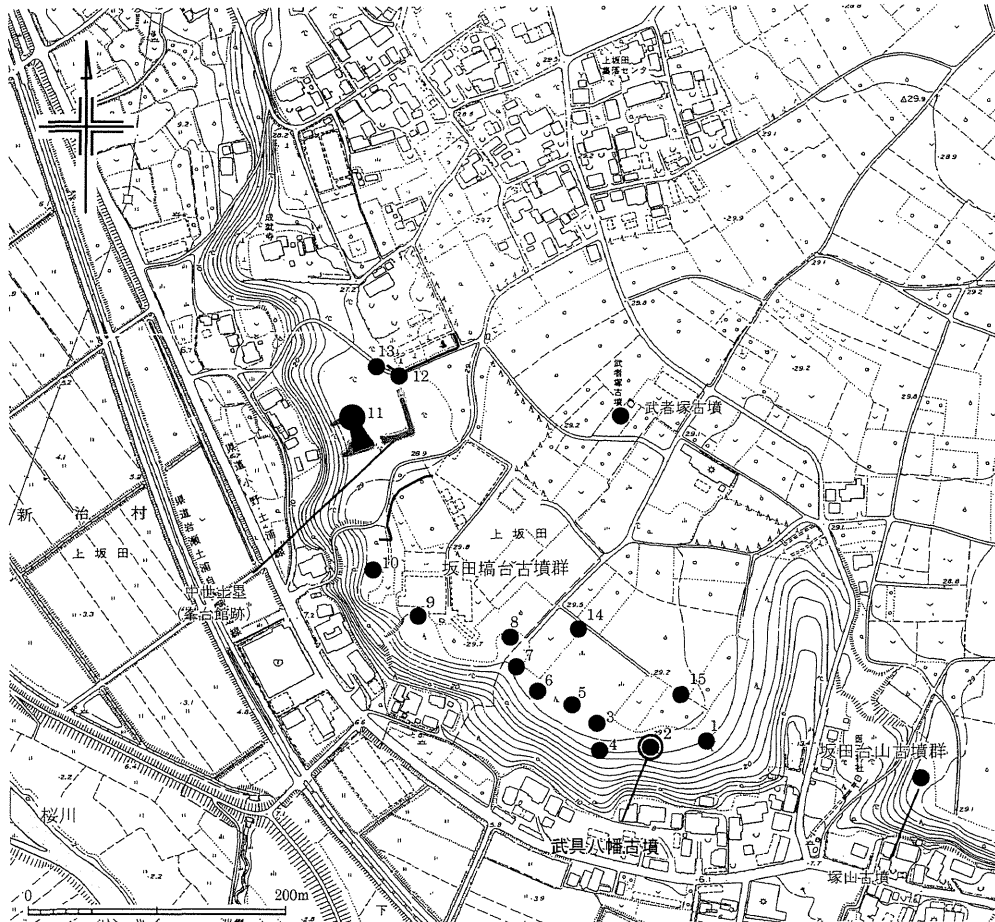
坂田地区には、本古墳が属する坂田塙台古墳群(1)が存在しており、現在14基の古墳が確認されている(第2図)。その多くは墳丘径10m前後の円墳であるが、8号墳と11号墳は規模が大きい。8号墳は改変が著しいものの、墳丘径約30mの二重周溝をもつ円墳とみられる(比

土浦市武具八幡古墳の発掘調査



第1図 武具八幡古墳周辺の古墳時代の遺跡  
(国土地理院発行2万5千分の1地形図をもとに作成)

1. 坂田塙台古墳群 2. 武具八幡古墳 3. 下坂田塙台遺跡 4. 武者塚古墳群 5. 武者塚古墳
6. 坂田台山古墳群 7. 下坂田中台遺跡 8. 下坂田八幡神社古墳群 9. 赤弥堂遺跡 10. 下坂田向山古墳群
11. 坂田立野古墳群 12. 上坂田塚原遺跡 13. 上坂田塚原古墳群 14. 上坂田北部貝塚 15. 藤沢東町古墳群
16. 藤沢東町遺跡 17. 大畑東遺跡 18. 大畑本田遺跡 19. 藤沢山後遺跡 20. 高岡愛宕山古墳
21. 高岡根古墳 22. 高岡岡の宮遺跡 23. 高岡大日塚古墳 24. 田宮古墳群 25. 大畑新田遺跡
26. 高岡丸の内館跡 27. 田宮梶の宮遺跡 28. 田宮榎平遺跡 29. 高崎山古墳群 30. 小高寄居古墳群
31. 小高天神遺跡 32. 沢辺田達原古墳群 33. 小坂ノ上遺跡 34. 北西原遺跡 35. 山川古墳群
36. 神明遺跡 37. 北西原古墳群 38. 西谷津西遺跡 39. 西谷津遺跡 40. 弁財天遺跡 41. 天神脇遺跡
42. 八幡下遺跡 43. 瓢箪塚古墳 44. 常名天神山古墳 45. 八幡台遺跡 46. 殿里古墳 47. 殿里遺跡
48. 殿里台古墳 49. 中都遺跡 50. 西山遺跡



第2図 坂田塙台古墳群分布図（小野塚 2010 を一部改変）

毛ほか 2013)。11号墳は墳丘長約28mの前方後円墳であり、採集された埴輪から6世紀前葉ないし中葉の年代が与えられている（小野塚 2010）。同地区の古墳群としては、ほかに武者塚古墳群（4）、坂田台山古墳群（6）、坂田八幡神社古墳群（8）、赤弥堂遺跡（9）、下坂田向山古墳群（10）、坂田立野古墳群（11）、上坂田塚原古墳群（13）、上坂田北部貝塚（14）が知られている。赤弥堂遺跡と上坂田北部貝塚では、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている（大賀ほか 2009, 設楽 1987）。また、坂田台山古墳群に属する塚山古墳や、「みづら」が検出された武者塚古墳は、7世紀代の築造とみられている（柴田編 2013, 増田編 1986）。古墳時代の集落遺跡としては、下坂田塙台遺跡（3）、下坂田中台遺跡（7）、赤弥堂遺跡（9）が挙げられる。下坂田塙台遺跡では古墳時代前期と後期の住居跡が検出され（比毛ほか 2013）、下坂田中台遺跡と赤弥堂遺跡では古墳時代各時期の住居跡が確認されている（柴田編 2013, 林編 2014, 大賀ほか 2009・2010・2011）。

坂田地区の北西にあたる田宮地区には、田宮古墳群（24）、田宮梶の宮遺跡（27）、高崎山古

墳群（29）などが知られている。田宮榎の宮遺跡からは、古墳時代前期の方形周溝墓3基が検出されている（高野・土生編 2001）。田宮古墳群と高崎山古墳群は、前方後円墳を含む古墳時代後期の古墳群である（斎藤 1990, 平沼・高野 2001）。一方、集落遺跡の調査事例は少なく、田宮榎の宮遺跡から古墳時代前期の住居跡2軒、高岡岡の宮遺跡（22）で古墳時代後期の住居跡5軒が検出されているのみである（高野・土生編 2001, 浅野 2003）。

坂田地区の南東にあたる常名台地区には、古墳時代前期の大型前方後円墳である瓢箪塚古墳（43）と常名天神山古墳（44）のほか、山川古墳群（35）、北西原遺跡（34）、北西原古墳群（37）などが知られている。山川古墳群では、古墳時代前期の方形周溝墓群と中期から終末期にかけての円・方墳群が確認されている（石川ほか 2004, 小川ほか 2007, 比毛編 2003・2004）。北西原遺跡と北西原古墳群からは、終末期の方墳が検出されている（石川・藤原編 2004, 比毛編 2003・2004）。集落遺跡としては、北西原遺跡と神明遺跡（36）において100軒以上の住居跡からなる古墳時代前期の集落が知られており（石川ほか 2004, 酒井ほか 2005, 橋場編 1998, 比毛編 2003・2004, 比毛・福田編 2006, 吉澤編 2002）、西谷津遺跡（39）、弁財天遺跡（40）においても同時期の集落が確認されている（比毛編 2003, 比毛・福田編 2006）。ただし、古墳時代中期の集落は認められず、後期の集落は西谷津遺跡と弁財天遺跡にのみ認められる（比毛編 2003, 比毛・福田編 2006）。

（齊木 誠）

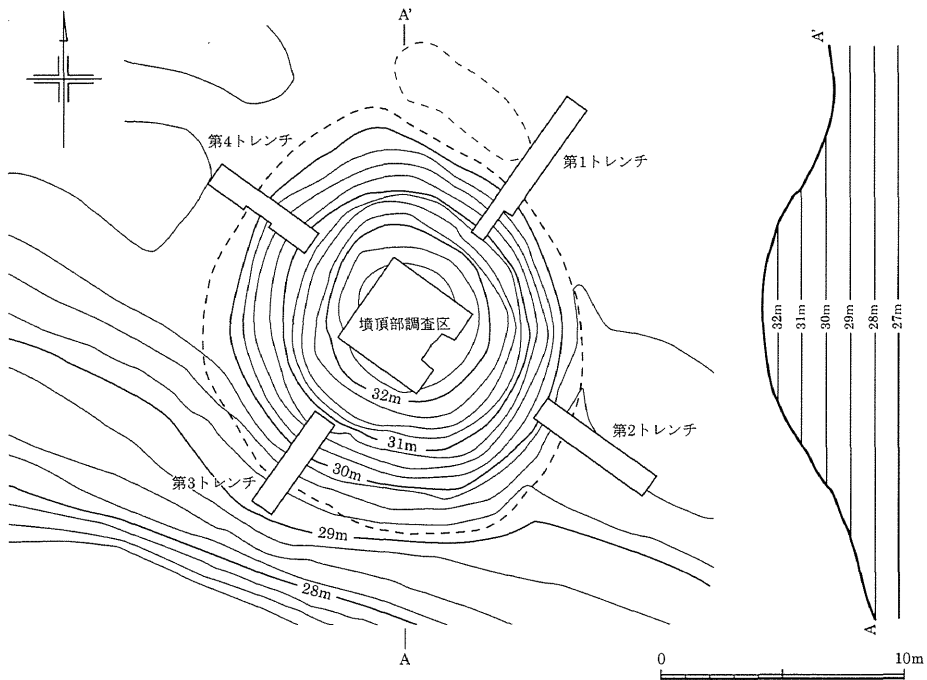
### Ⅲ. 調査成果の概要

#### 1. 古墳の現状と調査の方法

武具八幡古墳は、台地縁辺部の山林内に位置している。墳丘全体は雑木に覆われているものの、大きく改変されたような痕跡は認められず、残存状況は良好といえる。また、直径4mほどの平坦面をなす墳頂部には、安政元年（1854）の甲冑発見にかかわる石碑（安政2年）と供養塔（安政6年）が建てられている。このうち、「安政二丑四月十五日」の年号銘をもつ石碑の中央には「武具八幡」の文字が刻まれており、これが古墳名の由来となっている。

今回の調査は、二つの大きな目的に沿って実施した。その一つは、墳頂部を調査対象とし、埋葬施設の範囲や種別を明らかにするとともに、江戸時代末期に行われた掘削の痕跡を確認することである。もう一つは、墳裾部を対象とした調査により、古墳の形態や規模・構造を把握することである。以上の目的を達成するために、墳頂部と墳裾部に合計5ヶ所の調査区を設定し、調査を実施した。

各トレンチの配置は、第3図に示したとおりである。今回の調査区設定にあたっては、古墳の南側につづく台地斜面の傾斜方向を重視し、前年度の測量調査時に磁北に沿って設定した基準線よりも東に35度振った方向をあらたな基準線とした。この基準線にしたがって設けた4m四方の墳頂部調査区では、その内部をさらに4分割し、北西の区画から時計回りにA・B・C・D区とした上で、十字方向に幅40cmの土層観察用壁を設けて調査を進めた。一方、墳裾部には、東西南北の四方向に1m×7mを基本としたトレンチを設定し、北側から時計回りに第1・2・



第3図 調査区配置図 (S=1:300)

3・4トレンチと命名した。これらの調査区を合計した今回の調査面積は、36.6㎡である。

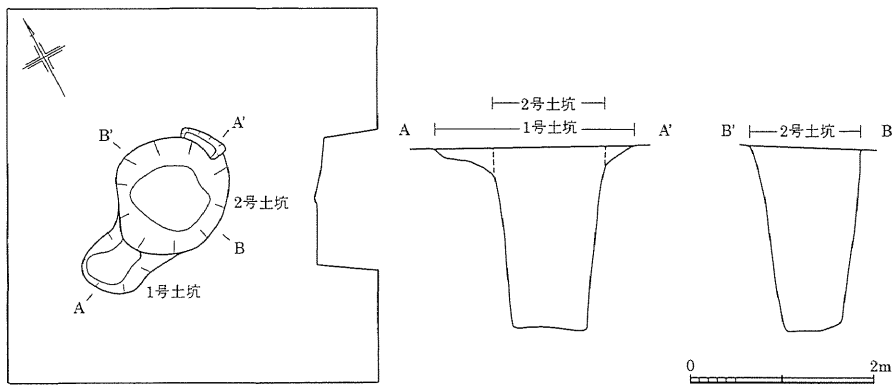
(大村冬樹)

## 2. 墳頂部調査区

墳頂部調査区（第4図）では、表土層を全体に約10cm掘り下げた段階で、A・B区の境界付近から須恵器の破片がまとまって出土した。この時点で、調査区中央の直径1m程度の範囲に、黒褐色を呈するしまりの弱い土が確認され、A区南側からは鉄鏃片数点、D区中央からは鉄製小札数点が出土した。鉄鏃や小札などの鉄製品はいずれも小片であり、特定の場所に集中することなく、A区やD区の数箇所とB区の中央寄りに点的にみられたことから、一度掘り起こされた後に埋没したものと推定された。

さらに掘り下げを進めたところ、調査区中央の現地表下約20～30cmの面で、やや黒味を帯びた土により埋没した落ち込みの輪郭を検出した。この輪郭は、長さ約2m、幅約1mの範囲に及んでいたことから、これを安政元年（1854）の掘削にかかわる土坑と想定して調査を進めた。その結果、一連ものと思われた落ち込みは、平面正円形を呈する2号土坑と、それにより破壊された平面略長方形の1号土坑が重複したものであることが明らかとなった。

当初、江戸時代の掘削坑と想定していた落ち込みは、古文書の記載により30～60cm（1～2尺）の深さで底面に達するものと考えていた。しかし、覆土の土質にほぼ変化がないまま確



第4図 墳頂部調査区平面図・遺構断面図 (S=1:80)

認面から1.9 mの深度で墳丘構築以前の旧地表面に到達した。この2号土坑は、直径約1.2 mの正円形に近いもので、その内部には黄褐色土ブロックをわずかに含む柔らかくしまりのない黒褐色土が一様に堆積していた。これは一気に埋め戻された状況をうかがわせるもので、堆積土中からは多数の鉄製小札片が出土した。これらの事実と墳頂部の堆積状況をあらためて検討すると、この土坑は表土層下10～15cmより何らかの意図をもって円形に掘り込まれたもので、その深さからみても安政元年の掘削坑とは異なるものと考えられる。なお、土坑内部の壁面観察では、黄褐色土ブロックや黒褐色土ブロックからなる土を交互に積み重ねた墳丘盛土の状況を確認することができたが、埋葬施設にかかわる痕跡は一切確認することができなかった。

1号土坑は、東側の大半を2号土坑により破壊されていたが、西側に長さ約0.6 mの部分が残存していた。また、その長軸方向にあたる2号土坑の東側では、1号土坑の東端部とみられる矩形の掘り込みをわずかに検出した。これらの事実から、1号土坑の規模は、長さ2.0 m、最大幅0.7 m、深さ約0.3 mに復元される。この土坑の西側部分では、やや浅い位置から横矧板鋌留短甲・後胴左脇の比較的大きな破片が出土した。その後の確認作業でこの破片と既出土品が接合したこと、土坑の深さが古文書の記録(1～2尺)とほぼ一致することから、この1号土坑が安政元年における甲冑発見時の掘削坑と考えられる。

以上の土坑を完掘したのち、調査区北側に墳頂部の堆積土がなお残存しているとみられたことから、A・B区をさらに10cmほど掘り下げた。その結果、2号土坑の北側で、鉄剣、鉄製石突、青銅製鈴などの金属製品が出土した。これらのうち、鉄剣については一部の破片に上下方向の反転が認められたものの、ある程度原位置に近い出土状況がうかがえた。しかし、ほぼ同一地点で出土した青銅製品はいずれも細片化していたこと、周囲の精査にもかかわらず埋葬施設の痕跡は一切確認できなかったことなどから、本古墳の埋葬施設はほとんど痕跡をとどめることなく削平されてしまったとみるのが妥当である。(大村冬樹)

### 3. 第1トレンチ

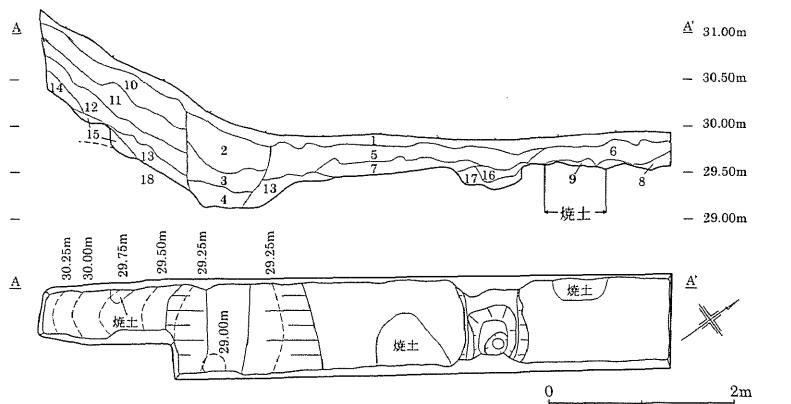
第1トレンチは、墳丘の北側に設定した幅1.0m、長さ6.8mのトレンチである（第5図）。ただし、南端部分から1.4mは、樹木との関係で幅0.7mの設定とした。

調査の結果、トレンチの南側において、遺構確認面からの深さが0.3mほどの溝状の掘り込みを確認した。この掘り込みは、トレンチ南端から約2.8mの地点で南側に向かって落ち込み、最深部で一端平坦面を形成したのち、トレンチ南端から約1.6m、標高29.2mの地点で立ち上がり、そのまま墳丘面へと続いていた。この掘り込みは墳丘下部の整形に伴うものと考えられるが、この部分にはほぼ重なるように表土層直下から別の掘り込みがあり、その最深部にあたる地山直上で磁器が出土したことから、墳丘の下端部は一部改変されているものとみられる。なお、標高29.7m付近から上方には黒色を呈する旧表土面が認められ、墳丘の下部はこれ以下を掘り込んで整形しているものと考えられる。

以上のほか、トレンチ北端から約1.8mの地点で土坑1ヶ所を検出し、その底面から石鏃素材剥片とみられる黒曜石片1点が出土した。さらに、トレンチ内から焼土集中地点3ヶ所を検出した。とくに、墳丘面で検出した焼土の周辺からは多数の縄文土器片が出土した。これらの縄文土器片は縄文時代早期末葉から前期初頭に位置づけられ、隣接する下坂田埜台遺跡でも同時期の遺構や遺物が確認されている（比毛ほか2013）。

本トレンチでは、上記の縄文土器、黒曜石片とともに、須恵器片5点が出土した。うち1点は、墳頂部から流れ込んだとみられる甕片である。このほか、弥生土器片、陶器片、磁器片が出土した。

（齊木 誠）



第1トレンチ 北側断面

1. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)	しまり弱	粘性弱	表土	10. 黒褐色 (Hue 10YR2/3)	しまり弱	粘性弱	
2. 極暗褐色 (Hue 7.5YR2/3)	しまり弱	粘性中		11. 極暗褐色 (Hue 7.5YR2/3)	しまり弱	粘性弱	
3. 暗褐色 (Hue 10YR3/4)	しまり中	粘性中		12. 暗褐色 (Hue 7.5YR2/2)	しまり弱	粘性弱	
4. 極暗褐色 (Hue 7.5YR2/3)	しまり中	粘性中		13. 暗褐色 (Hue 10YR3/4)	しまり中	粘性中	
5. 暗褐色 (Hue 10YR3/4)	しまり中	粘性中		14. 黒色 (Hue 10YR1.7/1)	しまり強	粘性弱	旧表土
6. 暗褐色 (Hue 10YR2/3)	しまり強	粘性中		15. 極暗褐色 (Hue 7.5YR2/3)	しまり強	粘性弱	旧表土
7. 暗褐色 (Hue 10YR3/4)	しまり中	粘性中		16. 黒褐色 (Hue 10YR2/3)	しまり強	粘性中	
8. 黒褐色 (Hue 10YR2/3)	しまり中	粘性中		17. 黒褐色 (Hue 10YR3/4)	しまり強	粘性中	
9. 極暗赤褐色 (Hue 5YR2/4)	しまり強	粘性中		18. 明褐色 (Hue 7.5YR5/6)	しまり強	粘性強	地山

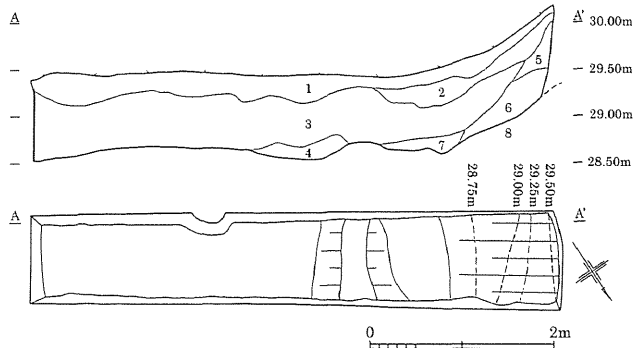
第5図 第1トレンチ平面図・土層断面図 (S=1:80)



4. 第2トレンチ

第2トレンチは、墳丘の東側に設定した長さ5.8 m、幅1.0 mのトレンチである（第6図）。

トレンチの西端では地表から1 mほど掘り下げた地点で地山とみられる明褐色土を検出し、そこから東に向かって落ち込む傾斜面を確認した。この傾斜面は、トレンチの西端から1.2 m、標高28.6 mの地点で傾斜を変え、わずかな平坦面に移行したのち、ごく浅い緩やかな立ち上がり



第2トレンチ 南側断面

- |                       |      |     |    |
|-----------------------|------|-----|----|
| 1. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4) | しまり無 | 粘性無 | 表土 |
| 2. 褐色 (Hue 10YR4/6)   | しまり強 | 粘性無 |    |
| 3. 黒褐色 (Hue 7.5YR3/2) | しまり強 | 粘性弱 |    |
| 4. 黒色 (Hue 7.5YR3/1)  | しまり強 | 粘性弱 |    |
| 5. 黒褐色 (Hue 7.5YR2/2) | しまり強 | 粘性無 |    |
| 6. 黄褐色 (Hue 2.5Y5/6)  | しまり弱 | 粘性無 |    |
| 7. 黒褐色 (Hue 7.5YR2/2) | しまり強 | 粘性無 |    |
| 8. 明褐色 (Hue 7.5YR5/6) | しまり強 | 粘性強 | 地山 |

第6図 第2トレンチ平面図・土層断面図 (S=1 : 80)

ら東に0.3 mほど進んだ地点で地山面は再び落ち込み、その後トレンチの東端にかけては比較的平坦な地山面が続いていた。

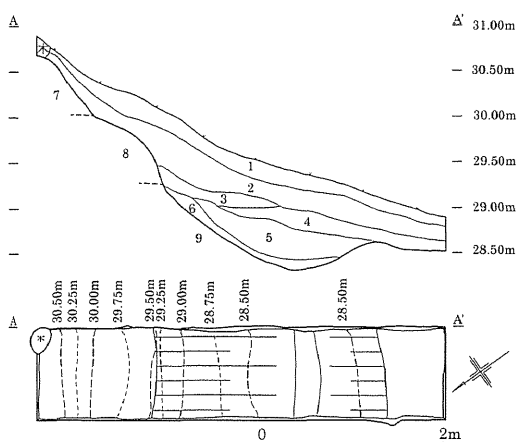
トレンチ内の土層断面観察によれば、第5～7層は自然堆積と判断され、それらによって埋没したトレンチ西側の傾斜面は、地山を削り出した本来の墳丘裾部であると考えられる。一方、第3層の下部では現代の遺物（ビニール等）が出土したことから、少なくとも第3層以上は現代以降に堆積した層であると考えられる。すなわち、本トレンチ内には、墳裾部とみられる傾斜面の外側に周溝状のわずかな掘り込みを残すものの、トレンチの中央部より東側は地山面にいたるまで現代以降の大きな削平を受けているものと判断される。

本トレンチでは、第3層から弥生土器片、かわらけ片、不明土師器片がわずかに出土したものの、明らかに古墳に伴うとみられる遺物は出土しなかった。（加藤千里）

5. 第3トレンチ

第3トレンチは、墳丘の南側に設定したトレンチである（第7図）。当初は長さ2.0 m、幅1.0 mのトレンチとしたが、調査の必要性から墳丘に向けて1.0 mずつ拡張していき、最終的には長さ4.5 m、幅1.0 mのトレンチとなった。

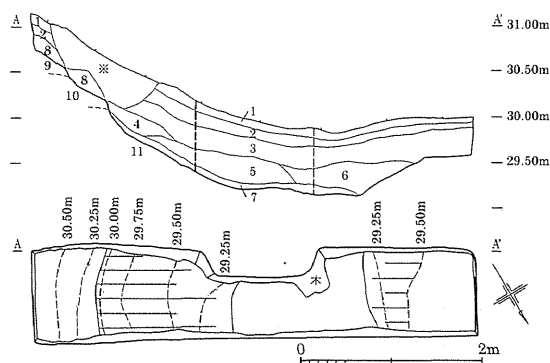
調査の結果、トレンチ北端から0.6 mの範囲に墳丘盛土（第7層）とみられる傾斜面を検出し、それに続く同0.6～1.4 mの範囲に旧表土とみられる黒色土（第8層）の面を検出した。この旧表土面はしばらく緩やかな傾斜をなしていたが、トレンチ北端から1.3 m付近で傾斜が急になり、同1.4 m付近からは緩やかな傾斜をなす明褐色土の地山面（第9層）へと移行していた。地山面は幅約2.4 mの溝状に掘り込まれており、トレンチ北端から2.8 m、標高28.3 mの地点で最も深くなったのち、ほとんど平坦面を形成することなくトレンチ南端から0.8 mの地点ま



第3トレンチ 東側断面

- |                        |      |     |      |
|------------------------|------|-----|------|
| 1. 極暗褐色 (Hue 7.5YR2/3) | しまり無 | 粘性無 | 表土   |
| 2. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)  | しまり弱 | 粘性無 |      |
| 3. 黒褐色 (Hue 10YR 2/3)  | しまり弱 | 粘性弱 |      |
| 4. 極暗赤褐色 (Hue 5YR2/3)  | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 5. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)  | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 6. 暗褐色 (Hue 5YR3/4)    | しまり強 | 粘性中 |      |
| 7. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)  | しまり弱 | 粘性無 | 墳丘盛土 |
| 8. 黒色 (Hue 7.5YR1.7/1) | しまり中 | 粘性弱 | 旧表土  |
| 9. 明褐色 (Hue 7.5YR5/6)  | しまり強 | 粘性強 | 地山   |

第7図 第3トレンチ平面図・土層断面図 (S=1:80)



第4トレンチ 南側断面

- |                         |      |     |      |
|-------------------------|------|-----|------|
| 1. 黒褐色 (Hue 10YR2/3)    | しまり弱 | 粘性弱 | 表土   |
| 2. 黒褐色 (Hue 7.5YR2/3)   | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 3. 暗褐色 (Hue 5YR3/4)     | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 4. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)   | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 5. 黒褐色 (Hue 7.5YR2/2)   | しまり中 | 粘性弱 |      |
| 6. 暗褐色 (Hue 10YR3/3)    | しまり中 | 粘性中 |      |
| 7. 褐色 (Hue 7.5YR4/6)    | しまり強 | 粘性中 |      |
| 8. 暗褐色 (Hue 10YR3/4)    | しまり中 | 粘性弱 | 墳丘盛土 |
| 9. 暗褐色 (Hue 7.5YR3/4)   | しまり中 | 粘性弱 | 墳丘盛土 |
| 10. 黒色 (Hue 7.5YR1.7/1) | しまり中 | 粘性弱 | 旧表土  |
| 11. 明褐色 (Hue 7.5YR5/6)  | しまり強 | 粘性強 | 地山   |
- ※植物の根が多い攪乱層

第8図 第4トレンチ平面図・土層断面図 (S=1:80)

で緩やかに立ち上がっていた。トレンチ内の堆積状況をみると、全体の自然堆積に大きな乱れはなく、下層から新しい時期の遺物も出土していない。したがって、本トレンチ部分では後世の大きな改変はなく、墳裾部が本来に近い状態で残存していたものと考えられる。

本トレンチにおいて土器片は一切出土しなかったが、筑波石の破片が第5層から出土した。また、調査中にトレンチ周辺で土器片を採集したが、古墳時代の土器はなく、縄文土器と弥生土器が多数を占めていた。

(久永雅宏)

#### 6. 第4トレンチ

第4トレンチは、墳丘の西側に設定したトレンチである(第8図)。当初は長さ3.0m、幅1.0mで設定したが、調査の必要性から墳丘に向けて1.0mずつ拡張していき、最終的には長さ5.0m、幅1.0mのトレンチとなった。

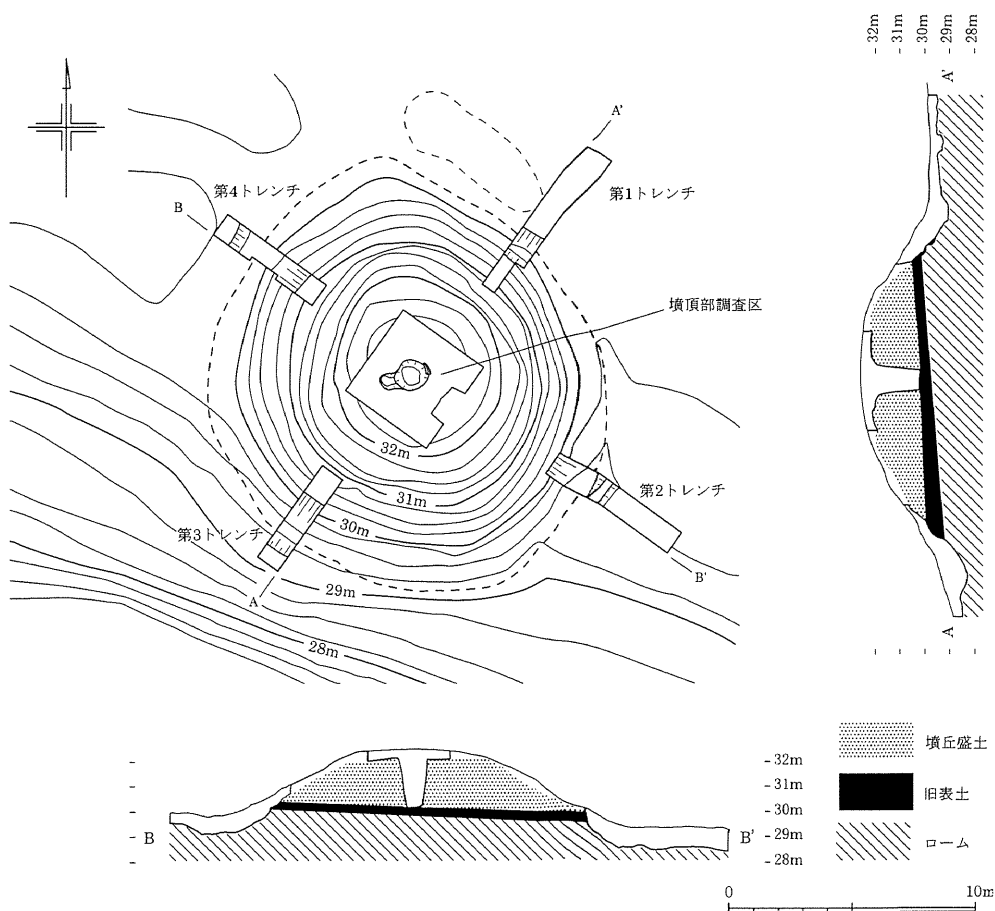
調査の結果、第3トレンチと同様に旧表土面と溝状に掘り込まれた地山面を確認することができた。トレンチの東端から0.4mの範囲には墳丘の盛土層(第8・9層)を確認し、同0.4~0.8mの範囲には、緩やかに傾斜する旧表土面(第10層)を検出した。旧表土面の下方に続く地山面は、トレンチの東端から0.8~2.2mの範囲において緩やかに傾斜し、その下端となる標高29.2mの地点から先に幅1.5mほどの平坦面を形成したのち、トレンチ西側でふたたび

立ち上がっていた。このように、本トレンチでは墳丘の下部を旧表土層以下の掘り込みにより整形し、墳丘の周囲が溝状をなしていることが明らかとなった。

本トレンチでは、第7層から土師器片や縄文土器片、弥生土器片が出土したものの、それ以外に目立った遺物は出土しなかった。(久永雅宏)

### 7. 墳丘の構造

第9図に今回の調査成果をもとに復元した武具八幡古墳の基本的な墳丘構造を示す。各トレンチで検出された旧表土層と地山層は、図中のA-A'ラインでは北側から南側へ、B-B'ラインでは西側から東側へと緩やかに傾斜している。これは、台地縁辺部に向かって傾斜する自然地形を反映したものとみられ、墳頂部調査区(2号土坑)で確認された旧表土層上面の標高(32.25m)とも矛盾しない。また、こうした自然地形のあり方から、A-A'ラインでは南側の墳端が北側の墳端よりも0.8mほど低く、B-B'ラインでは東側の墳端が西側の墳端よりも0.5mほど低くなっている。なお、各トレンチで検出された旧表土層は0.4m~1.0mほどの厚みがあり、



第9図 墳丘の構造 (S=1 : 300)

旧表土層上面は墳端よりも 1.3 m～1.7 mほど高い。

以上の事実を総合すると、武具八幡古墳の墳丘構築に際しては、当時の地表面を 1.5 m前後の深さで溝状に掘り込んで墳丘の下半部を整形し、それによって得られた土を 2 m以上の高さに積み上げて墳丘上半部の盛土としたことが想定される。これにより、墳丘の周囲には周溝が形成されることになるが、その内縁部斜面は墳丘斜面に連続的に移行していることから、その下端部を墳端とみるのが妥当である。こうした理解によれば、発掘調査成果にもとづく武具八幡古墳の墳丘規模は、A-A'ラインで 14.3 m、B-B'ラインで 15.0 mとなる。また、現墳頂部までの高さは、南側で 4.4 m、北側で 3.6 mとなる。なお、今回のトレンチ設定では墳形を確定するにいたらないものの、墳丘の東側裾部に認められる窪みが周溝の存在を反映しているとの見方に立てば、本古墳は従来どおり円墳とみなすことができよう。(齊木 誠)

#### IV. 出土遺物

##### 1. 出土遺物の内訳

武具八幡古墳の墳頂部からは、1854年(安政元)に鉄製甲冑類がまとまって出土している。それらの出土品は破片化した状態で地主宅に保管されており、主なものとして、衝角付冑 1、眉庇付冑 1、横矧板鋌留短甲 1、小札甲 1、頸甲 2(うち 1には肩甲が付属)が認められる。また、小札甲を構成する多量の小札(腰札、裾札を含む)とは別に各種の小札があり、それらの中には篠籠手にかかわる破片も存在する。このほか、長頸鏃(片刃式)の一群が認められるものの、それ以外の武器類や他の副葬品は含まれていないことから、当時の掘削範囲は甲冑類がまとまって存在した地点に限定されたものであったと推測される。

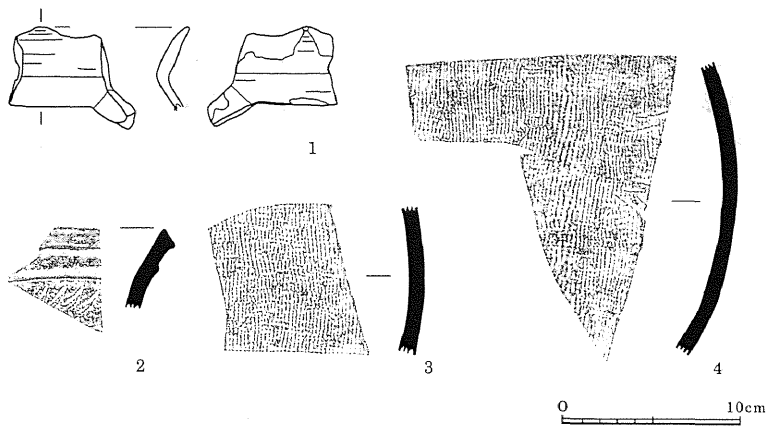
今回の調査では、墳頂部調査区から、鉄剣 1、鉄製石突 2、青銅製鈴(破片) 1、不明青銅製品(破片) 1が出土したほか、D区を中心に多数の小札片や鉄鏃片が出土した。また、墳頂部の 1号土坑からは、横矧板鋌留短甲・後胴左脇部の破片(既出土遺物と接合)が出土した。このほか、墳頂部調査区の表土層でまとまった須恵器の破片が出土し、各トレンチでは土師器や須恵器の破片が出土した。

以下、過去の出土遺物との関連で再整理が必要な鉄製甲冑類と鉄鏃を除き、今回の調査で出土した主な遺物について記す。(滝沢 誠)

##### 2. 土器

出土した土器はいずれも破片で、その多くは墳頂部の比較的浅い位置から出土した。以下、器種と部位の特定が可能な主なものについて述べる。

土師器には、墳頂部 A・D 区の境界付近から出土した壺の破片がある(第 10 図 1)。口縁部から頸部にかけての破片で、頸部は全周の 1/8 程度が残存している。頸部の直径は約 6cm に復元できることから、中型の壺と推定される。口縁部から肩部にかけての外面と口縁部内面には赤彩が施されている。内外面には横方向のナデが観察できる。



第10図 土器実測図 (S=1:4)

須恵器には、墳頂部 A・B 区の境界付近からまとまって出土した多数の破片がある。この周囲では、前年度に測量調査を行った際にも須恵器の破片が複数採集されている。いずれも甕の破片で、出土状況からは同一個体とみられるが、接合できた破片はごく少数である。それらのうち唯一の口縁部片は、口唇部が断面三角形に肥厚し、その下方に巡る凸帯の下部には櫛描波状文が施されている（第10図2）。大多数を占める胴部片は、外面に平行タキが認められ、内面の当て具痕は完全にすり消されている（第10図3・4）。これらの須恵器は、その技法的特徴から古墳時代中期に位置づけられる。（大村冬樹）

### 3. 鉄製品

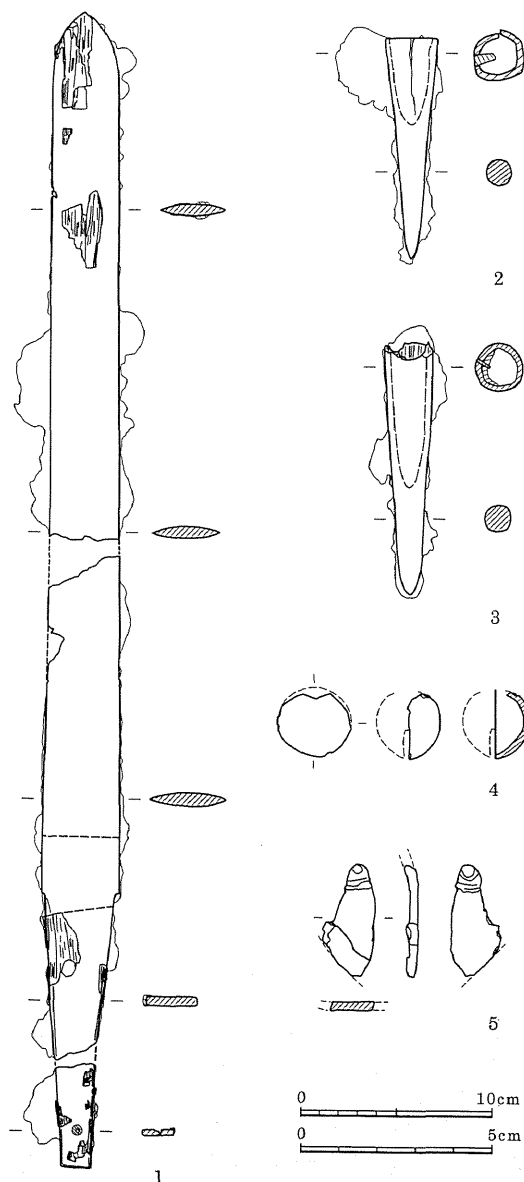
鉄剣（第11図1）は、2号土坑の北側で鋒を西に向けた状態で出土した。身部と茎部の2ヶ所に接合できない部分があるものの、出土状態から同一個体とみられる。

残存部分の総長は58.8cmで、身部は現存長44.8cm、最大幅4.0cm、最小幅3.5cm、厚さ0.7cmを測る。身部の断面形はレンズ状で錆は認められない。関部は両側とも撫関で0.2cmほどの段がつくり出されている。茎部は茎尻に向かってやや内湾しながら細くなる形状で、現存長14.0cm、最大幅3.6cm、最小幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。茎尻の近くには直径0.5cmほどの目釘孔が残っている。目釘孔の内部には木質が付着しているため、木製の釘が使われていたものとみられる。表面観察の範囲では、他の目釘孔を確認することはできない。茎部の表面には、把木とみられる木質の付着が認められる。また、関部から身部にかけての長さ3.0～4.0cmの範囲に鹿角ともみられる付着物が認められることから、本品には鹿角の鞘口装具が伴っていた可能性が考えられる。

鉄製石突（第11図2・3）は、2号土坑の北東側で先端を北東方向に向けて2点が出土した。2は、全長11.4cm、袋端部の直径は2.8cmを測る。袋端部は直線状、断面形は六角形とみられる。袋端部から4.1cmの範囲には袋部の合わせ目が明瞭に確認できる。袋部内側には木質が付着し

た目釘が残っており、合わせ目と目釘の方向は直交している。

3は、全長13.2cm、袋端部の直径は2.6cmを測る。袋端部は直線状、断面形は六角形または八角形とみられる。袋部の合わせ目は現状では確認することができない。袋部内面と外面に残っている目釘は袋部の合わせ目と直交する方向に打ち込まれている。また、袋部内面だけでなく袋端部の外面にも木質が遺存しているため、木製の柄に袋端部を受け止める段があった可能性が考えられる。



第11図 鉄製品・青銅製品実測図  
(1～3はS=1:4, 4・5はS=1:2)

以上の2例は袋端部が直基式になっていること、断面形が六角形または八角形の多角形袋式となっていることが注目される。こうした石突と同様の特徴をもつ銚身は、臼杵勲の編年では第Ⅲ段階（5世紀後半～6世紀初頭）、高田寛太の編年ではⅡ期（5世紀中葉以降）に位置づけられる（臼杵1985、高田1998）。銚身と石突のつくりが共通しているとの前提に立てば、武具八幡古墳に副葬されていた鉄銚の年代は古墳時代中期後半に求めることができる。（久永雅宏）

#### 4. 青銅製品

鉄剣の鋒付近で青銅製鈴の破片（第11図4）が出土した。半球状に1/2程度が遺存し、正面幅1.9cm、側面残存幅0.85cm、残存高1.5cmを測る。遺存状態から推定される側面幅は約1.7cm、鈴体高は約2cmで、やや扁平な小形の鈴であると考えられる。肩部より上は欠損しており、鈕の形状は不明である。

古墳から出土する青銅製の鈴には装飾用の鈴や馬鈴のほか、鈴鏡、鈴釧、鈴杏葉などが想定される。それらはいずれも東日本に偏在する傾向にあり、馬具や武具と共伴する事例の多いことが古くから指摘されている（森本1928）。古墳時代中期の鈴について検討した田中裕

は、馬鈴とされるものは高さが4.0cm前後、幅が3.5cm前後以上に集中し、それよりも小形の鈴は馬具との直接的な関わりが低いとの見解を示している(田中1992)。その指摘をふまえると、本品は馬鈴の一部ではなく、鈴鏡の一部か、帯金具や馬具など多岐にわたる装飾品の一部であった可能性が考えられる。なお、表面には赤色顔料が付着している。

不明青銅製品(第11図5)は、上記の鈴の近くで出土した。わずかな破片で、最大高2.9cm、最大幅1.4cm、厚さ約0.2cmを測る。残存する縁辺部の幅0.5cmほどは、段差をもってわずかに厚みを増している。また、縁辺部から反対側に向かってわずかに内湾しているほか、先端部には丸い隆起のようなものが観察される。青銅製鈴の破片が出土していることから、鈴鏡の可能性も考えられるが、鏡にしてはやや薄手で文様に乏しいため、青銅製の馬具もしくは帯金具などの一部である可能性が考えられる。表面には鈴片と同様に赤色顔料の付着が認められる。

(加藤千里)

## V. まとめ

今回の発掘調査では、江戸時代末期に多くの鉄製甲冑類が出土した武具八幡古墳の実態に少なからず迫ることができた。その成果は、およそ次の4点にまとめられよう。

第一の成果は、墳丘の構造と規模を具体的に把握することができた点である。各トレンチの調査所見を総合すると、墳丘の下半部は当時の地表面を周溝状に掘り込んで整形していること、墳丘の上半部は黄褐色土と黒褐色土を互層とした盛土によって構築していることが明らかである。また、墳丘斜面の下端を基準とした墳丘規模は14.3～15.0mで、現墳頂部までの高さは3.6～4.4mである。本古墳については、豊富な鉄製甲冑類の出土から小規模円墳とすることに懐疑的な見方もあるが、今回の調査成果と立地条件から判断して、円丘部以外の明確な墳丘部分を想定することは困難である。

第二の成果は、安政元年(1854)の甲冑出土地点を明らかにすることができた点である。墳頂部の調査成果から、安政元年の掘削坑は、墳頂部のほぼ中央で検出された1号土坑とみられる。この土坑は、その後に掘り込まれた2号土坑により東半部を破壊されていたが、長さ2.0m、幅0.7m、深さ0.3m程度の平面略長方形に復元できる。一方の2号土坑は、直径1.2m、深さ約2mの土坑で、何らかの意図をもって深く円形に掘り込まれ、その後埋め戻されたものとみられる。この土坑については、地権者の長老も記憶にないとのことで、その用途は判然としない。

第三の成果は、埋葬施設の残存状況に関する所見が得られた点である。ただし残念ながら、今回の調査結果から判断する限り、本古墳の埋葬施設はほぼ跡形もなく破壊されているとみられる。墳頂部であらたに出土した鉄剣は原位置に近いものと思われるが、その周辺で埋葬施設の明確な痕跡を確認することはできなかった。断片化した青銅製品の出土状況や、墳頂部堆積土の篩掛けで鉄製品(ほとんど甲冑類)以外の細片が一切回収できなかった事実からみても、本古墳の墳頂部はある時点で大がかりな削平を受けたものと考えざるを得ない。その削平時期

は、2号土坑の掘り込み面よりも下層において副葬品の二次的な移動が認められたことから、2号土坑の掘削以前と判断される。安政元年に甲冑類が相当程度遺存していた点を考え合わせると、墳頂部の削平は安政元年以降、2号土坑掘削以前とみられるが、甲冑のみが削平を免れていたとすれば、安政元年以前に削平を受けていた可能性も否定できない<sup>1)</sup>。なお、以上のような墳頂部の状況から埋葬施設の種別については判然としないが、古墳時代中期後葉以降に当地域で多用される箱式石棺の痕跡は確認できないことから、木棺直葬系の埋葬施設であった可能性が大きいと考えられる。

第四の成果は、上記のような墳頂部の状況にもかかわらず、本古墳の年代や性格を考える上で重要な出土遺物があらたに得られた点である。とくに、既出土品と接合する短甲の破片が1号土坑から出土したことは、今日伝わる鉄製甲冑類が本古墳から出土したことを確実に裏づける重要な成果である。また、今回出土した鉄剣や鉄製石突は古墳時代中期の所産とみられるもので、多数の破片が出土した須恵器の年代も同様に考えられる。これらの点は、古墳時代中期後葉に位置づけられる鉄製甲冑類の年代観と矛盾しない。このほか、わずかな破片として出土した青銅製品の存在も注目される。具体的な特定にはいたらないものの、青銅製鈴を伴う製品の存在は、本古墳の埋葬施設に豊富な副葬品が納められていたことを示唆している。青銅製の鈴付製品を副葬した古墳は、古墳時代中期後半から後期前半にかけて、群馬県東部から茨城県南西部の地域に集中して存在することが知られている。それらのうち、ほぼ同時期に位置づけられる茨城県筑西市上野古墳において、鈴鏡や異形鈴釧とともに複数の鉄製甲冑類（横矧板鋌留短甲、小札甲、篠籠手）が出土している事実は重要であろう（松尾・滝沢 1988）。上野古墳の埋葬施設は箱式石棺であり、馬具類（壺鍔、楕円形鏡板付轡、劍菱形杏葉）を同時に副葬している点でも本古墳とは異なるが<sup>2)</sup>、類似した副葬品のあり方は、共通の活動基盤をもった被葬者の存在をうかがわせるものである。

以上、今回の調査によって得られた成果を4点にわたってまとめたが、概要報告という本稿の性格上、ここでの理解はあくまでも暫定的なものにすぎない。とくに、本稿で詳しく取りあげなかった鉄製甲冑類については、あらたな出土資料を加えた再整理の途上にある。複数セットの鉄製甲冑を副葬した本古墳被葬者の軍事的性格や、桜川中流域における本古墳被葬者の政治的役割などについては、それらの整理結果をふまえた上で、あらためて検討の機会を設けることにしたい。

（滝沢 誠）

## 謝辞

今回の発掘調査に際しては、地権者である塙三苗氏にご快諾をいただくとともに、調査期間中の昼食場所を提供していただくなど、大変お世話になった。また、塙家の方々には、多方面にわたって心温まるご配慮をいただいた。あらためて厚く御礼を申し上げたい。

調査の実施にあたっては、茨城県教育委員会及び土浦市教育委員会のご理解、ご協力をいただくとともに、現地での調査や資料整理の過程で下記の方々から有益なご助言を賜った。記し



て感謝の意を表したい。

石川 功, 内山敏行, 亀井 翼, 木塚久仁子, 黒澤春彦, 塩谷 修, 中澤達也, 比毛君男, 牧 武尊, 茂木雅博 (五十音順, 敬称略)

#### 註

- 1) 多くの鉄製甲冑類が副葬されていたとみられる本古墳の場合, その他の副葬品がほとんど失われるような状況で, 大きな甲冑類のみがそれを免れたと考えることには無理があるかも知れない。あるいは, 安政元年以前に大きな削平を受け, 甲冑類と鉄鏃のみが墳頂部に再埋納されたと考えられるのも一案である。ただしその場合でも, 今回あらたに出土した遺物の年代や内容に照らして, 甲冑類が他の古墳から出土した遺物の再埋納品である可能性は小さいと考えられよう。
- 2) 1933年(昭和8)に畑地から発見された上野古墳の箱式石棺については, その北側に円丘部が残る茶焙山古墳(前方後円墳・推定墳丘長約70m)の前方部に存在した埋葬施設ではないかとの見方がある(茂木1986)。

#### 参考文献

- 浅野和久編 2003 『岡の宮遺跡』財団法人茨城県教育財団。
- 石川 功・藤原 均編 2004 『北西原遺跡(第1次調査)』土浦市教育委員会。
- 石川 功ほか 2004 『山川古墳群(第2次調査)』土浦市教育委員会。
- 白杵 勲 1985 「古墳出土鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 古墳文化研究会 1-7頁。
- 大賀 健ほか 2009 『赤弥堂遺跡(東地区)』土浦市教育委員会。
- 2010 『赤弥堂遺跡(中央地区)』土浦市教育委員会。
- 2011 『赤弥堂遺跡(西地区)』土浦市教育委員会。
- 小川和博ほか 2007 『山川古墳群(第3次調査)』土浦市教育委員会。
- 小野塚拓造 2010 「茨城県土浦市所在坂田塙台11号墳の測量調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』第21号 101-106頁。
- 斎藤弘道編 1990 『田宮古墳群』財団法人茨城県教育財団。
- 酒井清治ほか 2005 『神明遺跡(第5次調査)』土浦市教育委員会。
- 設楽博己 1987 「常陸地方における方形周溝墓をめぐって」『比較考古学試論』雄山閣 191-238頁。
- 柴田洋孝編 2013 『坂田台山古墳群・下坂田中台遺跡・下坂田貝塚』土浦市教育委員会。
- 高田寛太 1998 「古墳副葬鉄鏃の性格」『考古学研究』第45巻第1号 49-77頁。
- 高野浩之・土生朗治編 2001 『田宮楯の宮遺跡』新治村教育委員会。
- 滝沢 誠 1986 「武具八幡古墳」『武者塚古墳』新治村教育委員会 56-70頁。
- 辰巳祐樹 2015 「土浦市下坂田武具八幡古墳の測量調査及び地中レーダー探査」『筑波大学先史学・考古学研究』第26号 81-88頁。
- 田中 裕 1992 「小型埋葬施設出土の日本初期の鈴」『史跡森将軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書一』長野県更埴市教育委員会 536-544頁。
- 橋場君男編 1998 『神明遺跡(第1次・第2次調査)』土浦市教育委員会。
- 林 邦雄編 2014 『下坂田中台遺跡』土浦市教育委員会。
- 比毛君男編 2003 『山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡(第6次調査)・神明遺跡(第4次調査)』土浦市教育委員会。

滝沢 誠・大村冬樹・加藤千里

久永雅宏・齊木 誠

- 2004 『北西原遺跡（第3次・第4次調査） 山川古墳群（第1次調査）』土浦市教育委員会。
- 比毛君男・福田礼子編 2006 『弁財天遺跡 北西原遺跡（第5次調査）』土浦市教育委員会。
- 比毛君男ほか 2013 『下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群』土浦市教育委員会。
- 平岡和夫・高野浩之編 2001 『高崎山古墳群西支群第2号墳・第3号墳』新治村教育委員会。
- 増田精一編 1986 『武者塚古墳』新治村教育委員会。
- 松尾昌彦・滝沢 誠 1988 「上野古墳出土遺物の再検討」『関城町史』別冊史料編 関城町の遺跡 関城町 163-175 頁。
- 茂木雅博 1986 「鬼怒川中流域における古墳文化の展開」『関城町の歴史』第6号 関城町史編さん委員会 17-29 頁。
- 森本六爾 1928 「鈴鏡に就いて」『考古学研究』第2巻第3号 1-33 頁。
- 吉澤 悟編 2002 『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）』土浦市教育委員会。